

編集後記

2020年度広島国際大学総合教育センター紀要第五号を上梓します。顧みて、2019年11月に中国武漢にて発生確認、瞬く間に世界中に拡大したCOVID-19（新型コロナウイルス感染症）によって振り回された年度ではあった。本紀要は、例年、大体年末に原稿受理、その後、査読手続き、1月末から印刷作業開始というタイムスケジュールで刊行されるのだが、前号第四号（2019年度）の編集、印刷時期がちょうどわが国におけるCOVID-19（2020年2月11日WHO命名。）感染者の確認から感染拡大が進行する時期に重なったことが編集者の記憶に残っている。1月16日、国内初の感染者確認、28日には「指定感染症」閣議決定、30日にはWHOによる「国際的な緊急事態」宣言（3月11日「パンデミック（世界的大流行）」相当との見解発表）。本学でも3月6日には、15日予定の卒業式典開催方針変更の決定（講堂での全体式典中止、学科・専攻毎での学位記・修了証書の授与のみとする。感染予防に配慮、学科・専攻ごとに会場・時間を細分化（教室間距離の確保、開催時間調整、構内滞在人数の制限等。）、出席者を教職員および卒業生に限定。）がなされた。COVID-19については、当初よりその影響の長期化が予想された。安全な環境での学習機会の保障という観点から、大学教育についても「オンライン授業（遠隔授業）」の採用が推奨された（3月24日文科省「令和2年度における大学等の授業の開始等について」、学生の学習機会確保、感染リスク低減の観点から一定の条件のもとで「遠隔授業」導入を容認する旨の通知。）。

私の方は、本紀要の刊行を含めた学術・社会諸活動の継続にCOVID-19がどのような影響を及ぼすのか、素人ながら歴史に学び、見通しを立てようということで、ちょうど100年前のいわゆる「スペイン風邪」（1918-19年）、「SARS」（重症急性呼吸器症候群、2003年に発生。ちなみに新型コロナウイルスの正式名称はSARS-COV-2）、そしてわが国のCOVID-19対応の法的根拠となった「新型インフルエンザ等対策特別措置法」（2020年3月改正、2021年通常国会に更なる改正案提出、2月3日成立、13日施行。）の主要な「立法事実」（法律制定の根拠とされる「事実」というべき2009年流行の「新型インフルエンザ」等、感染症の歴史的経緯についてにわか勉強をしつつ、2020年度新学期に向けての「遠隔授業」教材作成（今回初めて「パワーポイント」を作成した。実際に使うと、なるほど便利で面白い。子どもが新しいおもちゃを与えられたようなもの、スキルアップを楽しみながらの作業であった。）に励みつつ、紀要の編集・刊行作業にあたった。世界中で真偽織り交ぜた様々な情報が錯綜、マスク不足、消毒用アルコール不足、何より各国において感染拡大による医療崩壊の危機が現実化するなど、現代社会の脆弱性が露呈、社会不安が高まる中での作業であった。先の見通しが立たない、得体のしれないウイルスの感染拡大状況にあって、刊行に尽力いただいた執筆者、職員、印刷会社各位にはあらためて感謝したい。

新年度早々に投稿募集を通知、その後は5月7日（COVID-19のため、授業開始時期延期。）より「遠隔授業」開始、試行錯誤の日々が続いた。「遠隔授業」については学生一人一人にネットを通じて毎回レスポンスするというのはやはり時間がかかるというのが率直な感想。もちろん、応答例をいくつか作成、適宜に張り付けるという対応が中心ではあるが、学生のレポート内容、質問とか

み合わない頓珍漢な応答は本意ではない。当たり前ではあるが一人一人の記述を確認、コミュニケーションが成立するよう応答を作成するには時間がかかった。気の利いた質問に気の利いた(?) 応答を考えるとというも時間を忘れる営み(時間がかかる)。ネットを介して、それなりに学生とのコミュニケーションは成り立っているようにも思えて、応答作成の時間もまた楽しいものではあった。しかし、学生―教員間、学生―学生間の対面コミュニケーションの欠如が学生を精神的に追い詰めたことも確かである。レポートに孤独感とないまぜの不安感を表出する学生もままみられ、ネットを通じて通り一遍の励ましを伝えることしかできず、次のレポート提出、応答があつてほっとすることもしばしば。9月15日文科省「周知」文書「大学等における本年度後期等の授業の実施と新型コロナウイルス感染症の感染防止対策について」において、「この際、大学等における教育は、オンライン等を通じた遠隔授業の実施のみで全てが完結するものではなく、豊かな人間性を涵養する上で、直接の対面による学生同士や学生と教職員の間の人的な交流等も重要な要素であることにも御留意いただき」と大学教育における対面による人的交流の重要性を指摘しているのはもったもな事と思う。

COVID-19以前の講義では、終了時にコメント・ペーパーを配布、回収、確認。学生の理解度、関心の所在等を把握しながら次回以降の講義内容に反映、学生からの質問に対しては次回の講義時間内に応答し、必要であれば質問した学生に個別に対応してきた。コメント・ペーパーのチェック、質問のピックアップ、次回の講義内容への反映、という手順である。対して、多人数が受講する「遠隔授業」の場合、個々の学生に対するレスポンス作成には(しつこいようだが)時間がそれなりにかかった。一方で、学生との個別のやり取り、その見返しも容易となるというメリットもある。個人的には、学生の反応がダイレクトに把握でき、個別の応答を教室で共有できる「対面授業」の方が、「チョーク芸者」の好みであつており、再開を希望するところではある。

COVID-19状況にあつて、自然諸科学はもとより、科学社会学、情報社会学、政治学(特に政治過程)、危機管理学等々、人文・社会諸学、また学際諸学の観点から興味深いドラマが展開されたし、されつつある。諸論考も多く公表されている。多様な立場、多様な観点から多様な議論が展開されることは望ましい。年末より広島県でも感染拡大(12月17日には感染確認者数140人、25日には141人を記録)、12月12日より県として広島市、廿日市市、府中町、海田町、坂町を対象に「新型コロナ感染拡大防止集中期間」実施、年明け18日からは、「広島市における緊急事態措置に準じた対策」を中核に県全体を対象とする第二次「新型コロナ感染拡大防止集中対策」が実施された(2月7日までの予定を2月21日まで延長。)。2月下旬より広島県では新規陽性確認者数1ケタ台と明るい兆しに思えるが、3月3日現在、首都圏1都3県では感染の減少ペース鈍化を受け、政府に緊急事態宣言の延長を要請する動きがあり、COVID-19はまだまだ予断を許さない。こうした状況にあつて、投稿いただいた執筆者各位、査読に協力いただいた先生方、担当職員、印刷会社各位にはあらためて感謝したい。ありがとうございます。総合教育センター改組(基盤教育センターへ)により「総合教育センター紀要」という名称は今回が最後となります。これまで刊行に尽力いただいた各位にも感謝しつつ、二〇二一年度紀要に向け、活動を継続したく思います。

村上智章 総合教育センター紀要編集委員長

執筆者

鶴田 一郎	広島国際大学	健康科学部
山口 雅史	広島国際大学	薬学部
兒玉 安史	広島国際大学	薬学部
笠岡 敏	広島国際大学	薬学部
藤田 貢	広島国際大学	薬学部
堀 隆光	広島国際大学	薬学部
三吉 愛子	広島国際大学	健康科学部
川俣 美砂子	高知大学	教育学部
鹿嶋 達哉	広島国際大学	健康科学部
飯野 矢住代	広島国際大学	健康科学部
中井 伸治	広島国際大学大学院	医療福祉科学研究科
金 炫勇	広島国際大学	健康スポーツ学部
服部 宏治	広島国際大学	健康スポーツ学部
佐伯 若夏	広島国際大学	健康スポーツ学部

広島国際大学 総合教育センター紀要 第5号 2021年3月 印刷
2021年3月 発行

編集・発行 広島国際大学 総合教育センター
〒739-2695 広島県東広島市黒瀬学園台 555-36
電話 0823-70-4901

印刷所 青木印刷株式会社
(広島県呉市安浦町内海北二丁目1番6号 電話 0823-84-2104)